

令和7年度 講座等企画団体助成事業

事業報告書 (ホームページ公開用)

講座名	きく・つながる・ひらく：沖縄から考える女性、LGBTQ+、そして多言語・多文化共生
日時	フィールドワーク：2025年11月22日(土) 9:00～17:00 ワークショップ：2025年12月13日(土) 13:30～15:30
目的	戦後沖縄の歴史から、現在の課題—性の多様性、軍事化、マイノリティ、多文化共生—との交差点を探る、実践的な対話と学びの場を構築することを目的とする。
対象	ジェンダー問題、多文化共生に取り組む個人や、学生、大学院生、研究者など
講師	フィールドワーク：伊江村 一般財団法人わびあいの里 元スタッフ 大畑豊 様 名護市「沖縄愛楽園交流会館」学芸員 鈴木陽子 様 ワークショップ：琉球大学人文社会学部 教授 阿部小涼 様
会場	フィールドワーク：伊江島(団結道場、伊江島補助飛行場、公益質屋跡(戦災遺構)、アハシヤガマ、わびあいの里、ヌチドゥタカラの家)、名護市済井出(沖縄愛楽園交流会館) ワークショップ：宜野湾市男女共同参画センターふくふく
定員	40名(申込者数：31名)
参加者数	29名
講演内容(概要)	<p>当団体は、沖縄におけるジェンダーに基づくあらゆる暴力の根絶と、ジェンダー平等・ジェンダーエクイティな社会の実現を目指し、ジェンダー政策や複合差別に関する調査研究を行っている。今回、宜野座綾乃琉球大学准教授が顧問を務める琉球大学のLGBTQ+学生サークル「琉大レインボー」と、OIST LGBTQ+ and Alliesによる合同イベント(2023年度琉球大学学長賞受賞)の一環として本企画を開催した。まず、11月22日に伊江島の戦跡および名護市の沖縄愛楽園交流会館を訪問するフィールドワークを実施し、12月13日に宜野湾市男女共同参画センターふくふくにてワークショップを開催した。</p> <p>ワークショップに先立って実施したフィールドワークでは伊江島と名護市の沖縄愛楽園交流会館を視察した。伊江島では強制集団死(集団自決)のあったアハシヤガマ、や戦後の軍事基地の拡張に抗議する住民運動の「団結道場」、島の35%を占める米軍海兵隊伊江島補助飛行場、土地闘争の写真や当時の活動に使われた物を展示している「ヌチドゥタカラの家」を実見した。沖縄愛楽園交流会館では、資料館、納骨堂、防空壕跡を辿り、隔離政策や強制堕胎の歴史を学んだ。参加者らは現場に今なお残る戦争や暴力への抵抗や、その土地で生きる人々の痛みの記憶に直接触れる経験を通して、現在に続く社会課題への理解を深めた。</p> <p>12月のワークショップでは、琉球大学の阿部小涼教授より、世界各地における直接行動の事例が紹介された。阿部教授は、「直接行動というと、心身を傷つけられながらも果敢に抵抗する、というようなイメージを持つ人が多いが、実際には様々な手段があり、シュプレヒコールをあげずに公然と姿を表すだけでも、直接行動になり得る」として、フラワーデモなどによって性暴力に関する刑法改正への機運が生まれたことなどが説明された。さらに世界では、オリジナリティのあるポスターやチラシ、雑誌の発行だけでなく、現場の待ち時間で刺繍や絵、版画などに取り組み、布地にプリントするなど、アートによる抵抗も多く見受けられる」として、多様な事例を共有した。続けて、「米軍に起因する事件事故、性暴力に抵抗する沖縄の人々の行動は、国際的にも認識されていることは、海外の雑誌類からも見えてくる。直接行動を多言語で情報発信することには大きな意義がある」と語った。また、「すでにアクションを起こしている人々が集い、それぞれの実践を共有し、つながることで、次の展開が見えてくる」と述べ、行動をつないでいくことの重要性を強調した。続くグループワークでは、海外からの参加者とオンラインで繋ぎ、実践に伴う障害や広く人々を巻き込むことの困難性など共通の課題が提起され、緩やかに参加を促す方策などに関するグッドプラクティスの共有や可能性について議論が進められた。</p> <p>フィールドワークおよびワークショップには、民族的・ジェンダー的に多様な背景を持つ参加者が県内外から集まった。本企画ではフィールドワーク、ワークショップのいずれも日英の通訳を介しつつ行われ、参加者らは日本語や英語が飛び交い、ワークショップの会場では翻訳機を用いて参加するポルトガル語話者の姿も見られるなど、多文化共生の</p>

	実践の場ともなった。
参加者の声	<p><フィールドワーク></p> <ul style="list-style-type: none"> ・阿波根さん達の活動や、愛楽園の歴史沖縄に住んでいても、触れる機会がなく、知らなかったことばかりで、とても興味深かったです。車の中では参加者の人とも話ができて、よかったです。 ・普段できない経験をさせていただいた。OISTは城壁に囲まれた丘の上に位置し、地域の人々との隔たりが物理的にもあると感じる中で、ツアーでは地域の記憶の大事な場所で説明を聞きくことができありがたかった。 ・このツアーに参加して、これまで自国の島でも、日常化されすぎて不可視化されていたが、沖縄と同じような軍事植民地主義の歴史を抱えていることが見えてきた。 ・阿波根 昌鴻さんの団結の家やぬちどう宝の家、愛楽園の手彫りの防空壕や強制的な墮胎の悲しい歴史など、このスタディーツアーに参加して初めて知りました。また、第2次世界大戦の沖縄戦の戦跡とその後の米軍の統治時代の展示をOISTの皆さんをはじめ、日本人ではない人とみるというのは大変興味深い体験でした。しかも多くの人は理系の科学者なのに、文化や歴史を興味深く話を聞いて学んでいる様子が印象的で、平和への思いがつながっていく可能性を感じました。 <p><ワークショップ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常業務の一部だと思っていた些細な行為が、実はアクティビズムの一部であったことに気づいた。 ・海外出身者として沖縄の課題にどう関わるか模索していたが、直接行動の現場では、沖縄の人々が温かく迎え入れてくれ、つながりを大切にしていることを実感した。(一部抜粋)
写真 フィールドワーク (伊江島)	
写真 フィールドワーク 愛楽園 文庫館	
写真 ワークショップ	
共催	公益財団法人おきなわ女性財団